

ウィーンの日本研究・日本語教育に携わった人々

— 戦間期を中心に —

小川 誉子美 (横浜国立大学)

ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

重盛 千香子 (リュブリャーナ大学)

chikako.bucar@guest.arnes.si

1. はじめに

日本とオーストリアの交流は、1869年の和親通商航海条約締結以来、ちょうど150周年を迎える。また、ウィーン大学日本学科の校舎の中庭には、1999年5月ウィーン日本研究所設立60周年を記念する碑が建立されている。すなわち、2019年は、ウィーン大学日本研究所設立から80年という記念すべき年でもある。

19世紀末のウィーン「世紀末のウィーン」は、様々な分野で文化、学術、芸術が花開き、魅力にあふれ、世界の若者を惹きつけた。日本からも政治家や学者らが渡った。第一次世界大戦後国土を縮小するが、ウィーンの魅力は衰えることなく、戦間期に日本からウィーンに渡った者はかなりの数にのぼる。彼らは、医学、法学、哲学、音楽、美術、民族学等を学ぶ留学生であった。歌人で精神科医である斎藤茂吉は、ウィーン神経学研究所で学び、後に、ウィーンの日本文学創始者となるスラヴィークと交わるようになる。一方、当時の留学生の中には、ウィーンはもとより、近隣のブルガリアやチェコで日本語の教壇に立った者もいる。

本稿は、こうした節目を迎え、ウィーンを拠点に開始された日本研究・日本語教育を振り返り(2章)、これまで日本語教育の歴史の中で取り上げられてこなかった人物を取り上げ、その活動を紹介する(3章)ものである。

2. ウィーン日本語教育

2. 1 第一次世界大戦以前：オーストリア・ハンガリー帝国時代

ウィーンの日本文学研究者といえば、創始者として知られるプフィッツマイヤー(August Pfizmaier, 1808-1887)の名を挙げなければならないだろう。はじめに、ヨーロッパにおける日本研究者の一類型ともいえるプフィッツマイヤーを生み出した背景と、その後のオーストリアの日本語教育への取り組みを紹介する¹。

ブラハで医学を学び開業医であったプフィッツマイヤーは、東洋語研究への関心が高じ、ウィーンに移り、ウィーン大学でトルコ語、アラビア語、ペルシャ語、中国語を教えるかたわら、柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』をドイツ語に翻訳(1847)した。これは、日本語の原書から西洋語への初の翻訳である。当時の彼の名は、ウィーン革命(1848年)の前年には、学者であり東洋に関心のあった、時の宰相メッテルニヒから日本語の起源に関する研究を依頼されるほどに知られていたという。プフィッツマイヤーは、革命後大学を去った後

¹ パンツァー (1982)、パンツァー・クレイサ (1989)、リンハルト (1994)、クライナー (2009)、小川 (2010)

は、民間学者としてシーボルト(Philipp von Siebold)の持ち帰った書籍をもとに数々の日本語文献の翻訳を行い、これらはオーストリア帝国アカデミーの出版物に公表している。

ウィーンに早期にこうした成果をもたらされた背景として、オーストリアはオスマントルコ帝国と国境を接し、優秀な通訳養成のために東洋学や東洋語研究が数世紀にわたり盛んであったということ、さらに、当時のウィーン宮廷図書館長がかなりの財力を投資してシーボルトの持ち帰った日本文献の収集に尽力したということ、また、オーストリア帝室印刷局が世界中のすべての文字を印刷する野心に燃えていたことなどが指摘されている。この時代、日本語通訳官の養成など差し迫った社会的需要があったわけではなく、シーボルトの持ち帰った文献・文物の整理から始まったのである。

日本を含む極東情報が現実的な意味を帯びてくるのは、条約の締結された 1869 年以降のことである。1873 年、オーストリアに日本の外交使節が置かれ、日本の万博出展(1867 年のパリ万博、1873 年のウィーン万博)等により、それまで王侯貴族しか目にする事のなかった日本美術も、一般市民の目に触れるようになり、日本の美術品や工芸品に関心が寄せられ、ジャポニズムを生み出す。一方、日清戦争以降は、極東地域が注目されるとともに警戒の目で見られるようになり、関心が高まった時期でもあった。そんな中、1893 年から 95 年、在京オーストリア・ハンガリー帝国代理公使をつとめたハインリッヒ・クーデンホーフ伯爵は、外務省に対し、「現代という時代の要請に応えるためには、ウィーンに中国語と日本語の講座を創設することこそ有効である」と進言したが、実現することはなかった。

このほか日本語研究に関して言えば、19 世紀のウィーンには、日本語の系統に関する画期的な研究があった。ハンガリー語とサンスクリット語を専門とするウィーン大学の言語学者ボラー(Anton Boller)が、「ウラル・アルタイ語族に属する日本語の実証的研究」(1857)で明らかにした、日本語がウラル・アルタイ語群に属するという学説は、後のアルタイ語比較言語学者らの議論の出発点となった。この点においても、19 世紀のウィーンには、記録されるべき重要な足跡があったと言えよう。

2. 2 戦間期：オーストリア共和国時代

第一次世界大戦で、オーストリア・ハンガリー帝国は解体、領土を縮小し、オーストリア共和国となった。パンツァー(1989)によると、当初は在京の外交使節団の派遣も財政的にままならず、日本研究はすべて何人かの個人の努力によって行われ、政府の明確な政策の存在はなかったという。一方、ウィーンには前述のように、日本から渡った留学生も少なくなかった。1924 年、ウィーン大学に日本語講座が開設されてから、彼らが断続的に教壇に立つのである。1930 年代になると、ウィーン領事養成学校(Konsularakademie)でも日本語が教えられるようになった。この機関は海外赴任者のための外務省の併設機関であったと思われる。現在、記録上確認できる日本語講座は、ウィーン大学とウィーン領事養成学校で行われたものである。以下に講師について紹介しよう。

まず、ウィーン領事養成学校で講師をつとめたのは、日本民族学の泰斗スラヴィーク(Alexander Slawik)、岡正雄(民族学)、ド・チョンホ(Do Cyong-Ho 先史学)、植田敏郎(ドイツ文学)である。ウィーン大学には、スラヴィーク、岡に加え、外山高一(比較言語学)、村田豊文(ドイツ文学)、渡辺護(美術・音楽)らの名前が記されている。スラヴィーク、ド、岡については後述する。

時代を追って見ていくと、最も古い記録は、外山高一(東京外国語学校卒・ドイツ語)に関するものである。彼は、1921 年から 23 年までブタペストの大学で日本語とモンゴル語を教えていたが、1924 年にウィーン大学で日本語を教えた。比較言語学を研究していた外山は、ウィーン大学でも、モンゴル語やアルタイ言語学を教えることを希望する大学宛て文書を残している。この文書は、ウィーン大学古文書館に所蔵されてい

るが、外山の希望は実現しなかったようだ。次に、1930年代になると、領事養成学校に受講生が集まり始める。植田敏郎(東京帝国大学卒・ドイツ文学)は、1931年からベルリン大学、ボン大学、ウィーン大学でドイツ文学を学び、ウィーン大学で博士論文をまとめ、領事養成学校で日本語を教え始めた。日本の外交文書には多様な受講生が参加していた様子が記されている。同じころ、岡正雄(東京帝国大学卒・社会学)も教壇に立った。岡は、1929年にオーストリアに渡り、ウィーン大学でヴィルヘルム・シュミットのもとで民族学を学び、博士論文を提出している。このほか、日本の外務省記録には、大使館の山西書記官が教えたという記録もある。

こうした俊英たちが集うウィーン大学に日本研究所(Institut für Japanologie der Universität Wien)が開設されたのは、1938年、ナチス・ドイツによるオーストリア併合の年であった。この機関は、東洋学研究所の一部門として活動を開始した。これは、日本で日墺協会を創設し会長を務めていた三井高陽の提案と出資によるものであった。三井は、ヨーロッパにおける日本情報、特に学術面での情報発信の必要性を痛感し、各地で図書の寄贈などの活動を行っていたが、ウィーンに念願かなって、日本研究機関の設置が実現したのである。このとき、三井の強い意向で、初代所長には岡正雄が就任、また、助手にはスラヴィークが就任した。この時三井は、教授と助手の給与とともに、5000冊の書籍を寄贈している。岡も、欧州各地の列強諸国の綿密な広報活動を研究し、日本の広報活動に対する意識の低さに厳しい意見をもっていた。ところが、翌年第二次世界大戦が勃発すると、スラヴィークは、1940年には応召され、岡も1940年一時帰国したが、独ソ戦勃発を理由に辞職してしまった。

三井は寄付を打ち切るが、研究所継続のため、ベルリン大学で日本語講師を務めていた村田豊文が呼ばれ、大学が閉鎖されるまで教えた。村田は、戦争が激化する中、爆撃の危険を避けて、三井の寄贈した5000冊の本を郊外に疎開させ、蔵書を守ったという。1944年には、ウィーン大学で美学を学び、後にソフィア大学で日本語講座を担当していた渡辺護(東京帝国大学卒・美学)も加わった。この研究所に対する資金援助は、5年計画で開始されたが、研究所所長交替時の手続きが設立時の条件に反するという理由で、出資者三井の強い意志によって打ち切られてしまった。

その後、日本研究所は1947年に民族学研究所の一部として再開され、スラヴィークの努力により1965年には日本学研究所(Institut für Japanologie)として独立、ウィーンの日本研究・日本語教育が再開されるのである。

3. 戦間期のウィーン - ウィーンで学び、日本研究所を支えた人たち

ここで、1930年代にウィーン大学で出会い、ウィーンの日本研究と日本語教育を支えた三人の人物をあらためて紹介したい。まず、ウィーン日本研究所の設立に関係して既に名前が挙がっている岡正雄(1898～1982)である。ウィーンに留学する前から、柳田国男などと交流・協力して民俗学雑誌などを出版、ウィーンではスラヴィークらと協力して日本学のネットワークを固め、ウィーン大で博士号を取得、研究所開設にも成功したが、その後一年で帰国してしまい、三井高陽を怒らせたという。外交文書などによると、岡はヨーロッパにおける学術活動・広報活動に関する自身の考え方を各会合で披露し、戦時下においては植民地統治のために重用されたが、そのため、戦後はしばらく公職を退いていた。後には、東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所所長としても活躍した。著作も多数ある。(ニコライ・ネフスキーの論考集編集など)

二人目は、スラヴィーク(Alexander Slawik 1900～1997)である。Budweiserというビールで有名な、現在のチェコ領にあるブドヴァイスで生まれた。岡とは2歳違い。軍人の家系で、父親が研究した日露戦争の文献を通じて、小さい時から日本に興味を示し、12歳ごろから日本語を独学、高校生の頃は既に古事記の原文

を読んでいたという。ウィーンで岡に出会い、岡の論文「古日本の文化層」のドイツ語訳を手伝い、岡の問題意識や方法論から大きな影響を受けた。1936年には岡と同じ民族学の分野で博士号を取得、その前後にウィーン領事養成学校やウィーン大学で日本語を教え、戦後1948年からは日本研究助手、後に教授として、あとに続く多くの研究者を育てた。中でもウィーン日本学派（Wiener Schule der Japonologen）と呼ばれるクライナー、パンツァー、リンハルト各先生方は皆、スラヴィーク先生の教え子である。

三人目のド・チョンホ（または To Yu-ho 都宥浩、1905～1982）をここに改めて紹介する。スラヴィークよりさらに5歳若く、1905年に咸興^{ハムフン}という李氏朝鮮発祥の地で生まれた（現在の北朝鮮、冷麺の本場だという）。京城高等学校、北京燕京大学を経て、1931年秋からドイツ・フランクフルト大学に留学するが、その頃強大な政治力を得たナチスの影響で指導教官が国外追放になり、ド・チョンホも一時捕らえられていたという情報もある。そのような事情からド・チョンホはウィーン大学に移り、そこで朝鮮人としてウィーンでは初めての博士号を取得した。ヨーロッパで博士号を取得する留学生はまだまだ少ない時代のことであった。戦局が悪化する中、ウィーン領事養成学校で日本語を教えながら、確固としたポストを探している時、ヘルシンキのラムステッド教授からのコンタクトがあったわけだが、残念なことにヘルシンキ大学も日本外務省も新しいポストの給与を確約することなく、ヘルシンキ行きは実現しなかった。船でアメリカ、日本を經由して一旦朝鮮へ帰国、しかしすぐまた日本へ渡り、岡のドイツ語からの学術書翻訳作業を手伝ったりした。しばらくして北朝鮮に帰国後、民族学や考古学の分野で要職を歴任するが、政治的というより学問的な論争が元で左遷され、韓国の研究者ホン・ソンピョによれば、地元の高校の教師として、1982年に亡くなったという事である。

以上の三人とその周辺の間人関係から、いくつかのネットワークが考えられる。まず、ヘルシンキのラムステッド教授は、自身のアルタイ言語学研究の分野でトルコのメンゲス教授、ハンガリーのプレーレ教授と交友があり、自分の研究のインフォーマントについて相談し、当時ウィーンで博士号を取ったばかりのド・チョンホの存在を知る。また、岡正夫の場合は、日本政府の広報宣伝活動が極めて貧弱であることを痛感していた折、三井男爵からのウィーン日本研究所設立の構想を受け、留学時代に知り合ったウィーン現地の日本人留学生、日本語講師、日本研究者の卵たちと連絡をとって、具体的な段取りを進め、研究所のオープンに漕ぎ着けたと思われる。

下の表にはウィーン大学アーカイヴで調べたものをまとめた。中心人物三人の論文取得の年と題名だが、三人とも東アジア古代史に関する内容の論文を次々にまとめて提出、博士号を取得していった様子がわかる。日本人、朝鮮人、オーストリア人のまさにこの三人が、戦間期の厳しい時期を持ち堪え、ウィーンの研究の誕生とその後の発展を支えたと言える。

	取得年	論文題名
岡正雄	1933	“Kulturschichten in Alt-Japan” 古代日本の文化層
ド・チョンホ	1935	“Probleme der koreanischen Geschichte in kulturellen Zusammenhang” 文化的文脈における朝鮮史の問題点

スラヴィック	1936	“Kulturschichten in Alt-Korea” 古代朝鮮の文化層
--------	------	--

付け加えると、ハン・ホンス(韓興洙)という人物は、ド・チョンホより5歳年下で、政情不安な折、スイスのフリブル大学で民族学博士号を取得、その後教授資格論文はウィーン大学で取得(論文題名は「東アジア文化史」)、終戦直後もウィーンに留まって「東アジアの民族学と文化史入門」などの講義を受け持っていたことが、ウィーン大学のアーカイブの記録に残っている。当時からウィーンとプラハの間を行き来し、1943年にはプラハで開催された展覧会「日本美術と工業デザイン (Japanese Art and Industrial Design)」の中心的な働き手として活躍し、その成功を機にウィーンでも「大東亜 (Gross-Ostasien)」という展示の企画があったが、戦局悪化のため実現しなかったという経緯がある。プラハでは韓国語と日本語を教えていたそうで、現地の講師と共に韓国語初級の教科書も作成している。宗教学、民族学を専門とする日本人(及び当時は日本国籍の朝鮮人)が、まだこれからという日本研究、及びその基礎となる日本語教育のために、あるいは学生としてのアルバイト、あるいは自身の分野での研究生生活を続けるための糧を得るために、現地の大学、また日本の大使館や領事館の意向にも対応しながら縁の下のような役割を演じたのではない。

4. 終わりに代えて - ヨーロッパで日本語を教える

昨今、ヨーロッパや日本の大学で言われているグローバル化、学際化であるが、実は日本語教育も、学際的な、つまり分野を超え、国籍や民族を超えた交流が基礎になって生まれたと言える。その一例がウィーンである。

1920年以降、日本学創設前夜には断続的に日本語教育が行われ、留学生らが教壇に立っていた。日本語教育は日本学の窓口であり、その頃の留学生にとっては生活の手段、給与を補助する日本側にとっては広報活動の窓口でもあった。戦後のウィーン日本学は民族学を中心に研究者を養成、ドイツその他の国へ多くの門下を送り出したのである。

参考文献

- 小川誉子美 (2014) 「ラムステッドと日本語学者たち—フィンランド側の資料をもとに—」
『ユーラシア都市文化叢書 2 沿バルト海の都市—ヘルシンキ、サンクト・ペテルブルグ、ベルリン—
特集号 ラムステッドとジルムンスキー』2号 pp. 3-14
- 小川誉子美・重盛千香子 (2013) 「ウィーン領事養成学校の日本語講師 Do Cyong-Ho について—フィン
ランドと日本の資料による新解釈—」 『日本語・日本語教育の研究—その今、その歴史』(加藤好
崇・新内康子・平高史也・関正昭 編著) スリーエーネットワーク
- 小川誉子美 (2011) 「日本語講師北山淳友の事績—戦間期の滞独時代を中心に—」 『日本学刊行』14
号 香港日本語教育研究会 pp. 4-15
- 小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景』 風間書房
- クライナー、ヨーゼフ (2009) 「岡正雄とアレクサンダー・スラヴィック 民族学的日本研究における二人
の開拓者」 『修好 140 周年記念日本とオーストリアの友好関係をふりかえって』 Bundesministerium
für europäische und internationale Angelegenheiten, pp.252-254

- パンツァー、ペーター、ユリア・クレイサ (1989) *Japanisches Wien*, Herold, Wien, [佐久間穆訳]
 (1989) 『ウィーンの日本』 サイマル出版会
- パンツァー、ペーター (1982) 「4.日本とオーストリアの文化交流 B.オーストリア＝日文化交流の歴史と現状」 『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』 日本東欧関係研究会 pp.111-126
- 松下紘一郎 (2002) 『茂吉さんは私の友人でした—スラヴィク博士と茂吉山人』 葦書房
- リンハルト、セップ (1994) 「オーストリアにおける日本研究」 『日本研究』 10号 国際日本文化研究センター pp. 21-33
- Beurteilung der Dissertation des cand. Phil. Dr. Masao Oka [signed W. Koppert, Wniger(?)]. Wiener
 Universitatarchiv: 1933 Rigorosenakt OKA Masao [September 2008]
- Beurteilung der Dissertation des cand. Phil. Dr. Cyong-Ho Do [signed Dopsch, Bauer]. Wiener Universitatarchiv:
 1935 Rigorosenakt DO Cyong-Ho [September 2008]
- HONG Son-pyo (2018) *Pioneering, Prolific, Purged: Aspects of To Yu-ho*. In: Schirmer, Andreas (ed.) (2018)
Koreans in Central Europe: Informal Contacts up to 1950, Vol. 2. Wien: Praesens.
- KLÖSLOVÁ, Zdenka (2018) *Han Hung-su in German-Occupied Prague*. In: Schirmer, Andreas (ed.) (2018)
Koreans in Central Europe: Informal Contacts up to 1950, Vol. 2. Wien: Praesens.
- OGAWA, Yoshimi, SHIGEMORI BUČAR, Chikako (2012) *The Japanese language instruction in Germany and
 Austria before 1945 : knowledge and information obtained in multifaceted research*. In: *Bridging the gap : past
 and present Japanese resources in the digital age : [Abstracts]*. Berlin: EAJRS Conference.
- OGAWA, Yoshimi, SHIGEMORI BUČAR, Chikako (2018) *A Korean who taught Japanese in 1930s Vienna: Do
 Cyong-ho (To Yu-ho) based on Finnish and Japanese sources. Koreans and Central Europeans informal
 Contacts up to 1950*, Vol. 2, Praesens, Vienna. pp. 33-44.
- SCHIRMER, Andreas (ed.) (2018) *Koreans in Central Europe: Informal Contacts up to 1950*, Vol. 2. Wien:
 Praesens.